

課題研究における生成 AI 利用ガイドライン

1. 目的

本校 SSH における課題研究では、生成 AI を「思考を代替する道具」ではなく、「思考を深め、研究を発展させる補助ツール」として適切に活用することを目的とする。

2. 基本方針

- 課題研究の主体は生徒自身である
 - 生成 AI は相談・補助・視点拡張のためのツールとして用いる
 - 研究の独自性・妥当性・責任は生徒が負う
-

3. 使用を認める主な場面（推奨例）

以下のような目的での利用は認める。

(1) 研究テーマ・問いの検討

- テーマ案の発想
- 研究として成立するかの確認
- 問いの具体化・条件整理

(2) 背景理解・基礎知識の整理

- 専門用語の説明
 - 分野全体の概要把握
 - 一般的な研究手法の把握
- ※出力内容は参考情報とし、事実確認を行うこと

(3) 実験・調査計画の検討

- 実験条件・変数の整理

- 想定される問題点の洗い出し
 - 安全面の注意点の確認
- ※最終判断は必ず教員と相談すること

(4) 結果の整理・考察の補助

- グラフ化の方法の検討
- 結果の解釈の選択肢提示
- 別の視点からの考察例の確認

(5) 文章表現・発表準備

- 論文調の表現への言い換え
 - 日本語表現の改善
 - 発表構成の助言
-

4. 使用を認めない行為(禁止事項)

以下の行為は課題研究として不適切であり、認めない。

- レポート・論文・考察文を AI に書かせてそのまま提出すること
 - 実験・調査を行っていない結果を AI で作成すること
 - AI の出力を出典を示さず自分の成果として用いること
 - 研究内容を理解せず、思考を AI に委ねること
-

5. 生成 AI 使用の記録

生成 AI を使用した場合は、以下を簡潔に記録する。

- 使用した目的(例:テーマ検討、考察の視点整理)
- AI から得た主な示唆
- それをどのように判断・修正・活用したか

※AI の使用そのものは減点対象としない。

6. 評価の考え方

- 評価は AI を使ったかどうかではなく、
 - 研究の問いを自分の言葉で説明できるか
 - 実験・調査の意味を理解しているか
 - 結果と結論が論理的につながっているかを重視する。
-

7. SSH としての位置づけ

生成 AI は、現代の研究現場でも活用されているツールの一つである。
適切に使いこなす力も、科学的リテラシーの一部として位置づける。

【生徒向け要点まとめ】

- ✓ 考えるのは自分
 - ✓ AI は相談相手
 - ✕ 書かせて提出しない
 - ✓ 使ったら正直に記録する
-

生成 AI の扱いを評価規準（ルーブリック）にどう組み込んだらよいか？

以下では、

1. 基本的な考え方
2. 既存ルーブリックへの組み込み方（構造）
3. 具体的な評価項目別の書き換え例
4. 教員間で評価をぶらさない工夫

の順で説明します。

1 基本原則（最重要）

✕ やってはいけない組み込み方

- 「AI を使った／使わない」を評価する
- 「AI 利用回数」を点数化する

✓ 推奨される考え方

生成 AI は“思考過程を可視化する材料”であり、
評価対象はあくまで生徒の理解・判断・説明能力である

➡ AI は評価の補助情報であって、評価項目そのものではない

2 SSH 課題研究ルーブリックの基本構造（例）

多くの SSH で既にある評価観点は次の 4～5 本柱です。

1. 研究課題の設定（問いの質）
2. 研究計画・方法
3. データの整理・分析・考察
4. 表現・発表

5. 研究への主体性・姿勢(プロセス)

👉 この「5 番」に AI を押し込むのが最も自然です。

3 評価観点別: AI を“にじませる”書き換え例

以下は**4 段階評価(A~D)**を想定した具体例です。
(必要に応じて 3 段階にも簡単に縮められます)

① 研究課題の設定(問いの質)

従来

課題が明確で、研究として適切である

AI 対応版

課題の背景・目的を理解した上で、
他者やツール(文献・生成 AI 等)から得た情報を取捨選択し、
自分の言葉で研究課題を設定している

評価の視点

- AI の提案をそのまま使っていないか
 - なぜその問いにしたか説明できるか
-

② 研究計画・方法

従来

適切な方法を選択している

AI 対応版

研究方法の妥当性や制約条件を理解し、
他者やツールの助言を参考にしつつ、
自らの判断で研究計画を立案・修正している

評価の視点

- ・ 「AI に言われたから」になっていないか
 - ・ 条件変更の理由を説明できるか
-

③ データ整理・分析・考察

従来

結果を分析し、考察している

AI 対応版

得られた結果について、
複数の解釈や視点(生成 AI 等の示唆を含む)を比較検討し、
根拠をもとに自分の結論を導いている

評価の視点

- ・ AI の解釈を批判的に見ているか
 - ・ 結論がデータに基づいているか
-

④ 表現・発表

従来

分かりやすく発表している

AI 対応版

表現方法の改善にツール等を活用しつつ、
内容の正確性と論理性を自ら確認し、説明できている

評価の視点

- ・ 質疑応答で理解が伴っているか
 - ・ 原稿を読んでいるだけでないか
-

⑤ 主体性・研究姿勢(★ここが核)

従来

主体的に研究に取り組んでいる

AI 対応版(最重要)

研究過程において、
生成 AI を含む外部の助言や情報を適切に活用しながら、
自分で考え、判断し、研究を進めている

A 評価の具体像

- ・ AI 使用を記録し、活用意図と判断を説明できる
- ・ AI の誤りや限界に気づいて修正している

C 評価の具体像

- ・ AI の提案を無批判に使用している
 - ・ 自分の理解が伴っていない
-

「AI 使用記録」をループリックと結びつける

記録は点数化しない

- ・ 使用の有無 → 不問
- ・ 記録内容 → 理解度の裏付け資料

教員の見方(共通理解)

- ・ 記録がある＝加点 ではない
- ・ 記録を読めば
☞ 「考えているか」「流されているか」が分かる

5 教員間で評価をぶらさないための工夫

共通の問い(評価者用)

評価の際、全教員が次を自問します。

- 「この生徒は、AI がなくても説明できるか？」
- 「判断の主体は誰か？」
- 「なぜそうしたのかを語れるか？」

➡ これだけで評価の軸が揃います。

まとめ

- AI は「評価項目」ではない。生成 AI の使用を成果として評価するのではなく、生成 AI を含む情報を批判的に扱い、自らの研究として再構成する力を評価する。
 - 既存ルーブリックの表現を少し書き換える
 - 評価するのは
 - ↳ 判断・理解・説明・修正の力
-